

精進

精進

精進と言う言葉は、仏教徒の、否、人間の正しい生活を現わした尊い言葉である。經典と言う經典にこの二文字を見出し得ないものはないであろう。「汝精進せよ。」とは、これ積尊の仏弟子に対する一貫したみ教であった。

人は生きている。生きているが故に必ず動く。心も動き、体も動く。

しかして、そのよき動きを精進と言ひ、悪き動きを懈怠と言ふ。されば、人生きて懈怠なるべからず、必ず精進であらねばならない。

純粹

すでに遺教經の講話において述べたが如く、精進とは

「精とは謂く、精純なり、悪雑無きが故に。」

進とは謂く、昇進なり、懈怠ならざるが故に。」

ということであつた。

精進の精とは、清純、清くして濁りけなきことである。されば清純とは純粹なることである。いかに頭髮につきたる火をもみ消すほど、右往左往、立ち働くとも、その心意にして純粹にあらざれば、精進ではあり得ない。

又如何にその心が純粹であろうとも、動かぬもの、一ところに停滞して進まぬもの、「昇進」なきものは、精進ではない。

三毒

精進とは、純粹にして悪雑なき心を精と言ひ、無限に昇り進むが故に、進と言われるのであつた。

悪雑……悪は必ず複雄である。複雄なるものは必ず悪である。故に悪雑と言われ。しかしてこの悪雑の動きは精進ではない。

悪雑とは何か。云く、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱の動きである。

貪欲は穢い心である。精純ならざる心である。人、五十年をこの貪欲に埋れて生きる。精進の二文字を知らずして、尊きこの世を空費する人である。巨満の富を積むとも畢竟、あさましき一個の餓鬼に過ぎず。

瞋恚は怖るべき毒であり、猛火である。一切の地獄はこれより生れる。瞋恚の炎、胸中に燃えて八万四千の劍、自他を殺す。雑悪、悪雑、はびこりて、一切の道、光、徳、善、すべて亡んで後をとゞめず。精進なく、歓喜なく、幸福なく、その他、一切無し。しかして我慢、貪欲の者は必ず瞋る。

愚痴は暗黒である。まず貪欲の心、これを満足すれば高慢となり、失敗すれば愚痴となる。瞋恚の炎には、必ず愚痴の煙をとまなう。自他一切を窒息せしめて、喜びを奪い、力を奪い、幸福をかすめる。

五欲の命ずるまゝに動いて、やがて行きづまるに及んで、必ず後悔がある。思い千々に碎けるとも、すべてこれ愚痴にすぎない。そこに一個の畜生横たわる。精進の二文字を知らず。

ああ、凡夫の正体、三毒につきる。悪雑なる哉。

念仏道

悪を為す者の心は複雑である。されば悪は悪雑であつて、精純、即ち純粹無雑ではあり得ない。唯一、純一、全一でない限り、たとえ、善を為せるように見えても、相続しない。一貫しない。故に精進とは言われない。

しかれば、三毒の煩惱を持てる我等衆生には、精進の二文字は、ついに空言にすぎないのであろうか。

しかるに、ああ、我等は何たる幸であるか。この精進の尊き二文字が、静かに、我等一切衆生の上に来りて生きたもう世界を、親鸞聖人の御化導を通して信知せしめられた。大無量寿経の教えこそ、まことに、一切群生の無条件に生かされる唯一絶対の道であつた。念仏道こそは唯一絶対の道である。すでに、一切の悪雑を越えたる、純粹無雑な道なるが故に、これに生かされて一貫するを、精進と言うのである。

他力

念仏は信心をその生命とする。信心は、涅槃、寂靜に通う心である。されば、念仏道は寂靜無為の樂に帰る道である。涅槃寂靜の樂に帰る生活、これを精進と言うのである。一如寂靜に通ぜざれば精進と言われず。

他力とは如来本願力これであつた。

涅槃寂靜そのままの南無阿弥陀仏は、靜に悪雑動乱の人生におとずれて、衆生をして涅槃の樂に往生せしめたもう。

されば他力とは、廣大にして眞実、純一にして清浄なるものの、我に実現したもうことである。

至尊！親様！み親はそのすべてを衆生に廻向したものであつた。念仏の子は、合掌して、この聖業に帰入し、み親の徳に生かされるのである。己を空しうして、お徳に生かされる、これを精進と言うのである。

無我

「一。仏法には無我と仰せられ候。我と思うことは些あるまじきこと也。われは悪しと思う人なし。これ聖人の御罰なりと御詞候。他力の御すすめにて候。ゆめ／＼我といふことはあるまじく候。無我といふ事、前住上人も度々仰せられ候。」

一切の悪雑、暗黒、退転等々は「我」から生れる。時間を惜しみ、身体を惜しみ、労力を惜しみ、金を惜しみ、幸福を惜しみ、名を惜しみ、やがて命を惜しむ。如何に、奮闘努力するも、怠けるも、「我」より出ざる限り、精進の二文字はその人より去る。

「仏法は無我にて候。」

無我は人間の正しい相、み法そのままの相、如来の御心にかなう相、善知識の仰せに生きた相、救われた相であり、道に生かされた相であり、純一無雑な生活であり、やがて、歓喜の生活であり、懺悔の生活であり、感謝の生活であり、知恩報徳の生活であり、ついに一道精進の相である。

無我の大信は、如来の本願によつて成就す。

報謝

南無阿弥陀仏においては一切がない。されば報謝の生活も、精進もただ如来の廻向したもうものである。

み親の徳を頂戴するより外、我においては微塵も尊きものを持たぬが故に、我ということの出しようがないのである。

されば信心決定の人は、

「一、大阪殿にて或人、前々住上人に申され候。『今朝暁より老ひたる者にて候ふが参られ候。神変なることなる』由申され候へば、やがて仰せられ候。『信だにあれば辛労とはおもはぬなり。信の上は仏恩報謝と存じ候へば苦労とは思はぬなり』と仰せられしと云々。」

信の上は仏恩報謝と思へば苦労とは思われぬ。そこに純一なる一道が横たわる。

「一。信決定の人は、仏法の方へは身を軽く持つべし。仏法の御恩をば重く敬ふべし。」

恩を知る者は報謝し、恩を知らざる者は貪る。

信決定の人とは、仏恩に生かされる人である。大法重し、身は軽し。永劫万劫かけて、この高恩を如何にせん。仏恩に生かされる信決定の行者の足は軽い。

本浄禪師云わく

「道を見るものは道を修す。見ずんば復何をか修せん。」と。

念仏の子は道を見る。道を見るが故に、道を精進する。道も他力なり、見るも他力なり、やがて

「一。実如上人さいく、仰せられ候『仏法の事わが心にまかせず嗜め』と御綻なり。

『心にまかせてはさてなり、』すなはち心にまかせず嗜む心は他力なり。」

「一。萬事に付いて善き事を思いつくるは御恩なり。悪しき事だに思い捨てたるは御恩なり。捨つるも取るも何れもく、御恩なり。と云々」

ここにおいてははじめ、報謝と精進との完全なる一致がある。念仏の境の何ぞそれありがたい哉。

難行道

「一。人はあがりく、ておちばを知らぬなり。『たゞ慎みて不断空恐ろしきこと、毎事に付けて心を持つべき』の由仰せられ候。」

「一。総体人には劣るまじきと思ふ心あり、この心にて世間には物を為習ふなり。仏法には無我にて候ふ上は人に負けて信をとるべきなり。理を見て情を折るこそ仏の御慈悲よ。」

敗けじ劣らじと、上りく／＼て頭を下げることを知らぬ心、即ち、我慢貪欲の心である。自力の心である。

自力食欲の人は、難行道を行く、その路暗く、その足重し。急作急修、如何に発奮努力するも、精進に非ず。

心せよ念仏の子。誤って久遠劫来の自力にかかわって、精進なき難行道を行くべからず。

一如寂静の世界に帰る精進の生活は、他力の信にのみ在り。他力なるが故に「精進」は易し。しかも人なし。